＜事例報告＞

歴史を紡ぐのは誰か
－座敷箒づくりを例として－

駒木敦子(鶴瀬公民館。令和 3 年 3 月まで難波田城資料館)

１）資料館の役割
－歴史を未来に伝えるために－

歴史民俗系地域資料館には、対象となる地域の考古資料（遺跡からの出土資料など）・文書資料（古文書や行政文書）・民俗資料（民具など）を収集し、保存して未来に伝える役割がある。そして、学芸員にはこれらの資料を調査・研究し、成果を広く市民に伝える責務がある。実物資料を保存するだけでは、その価値は伝わらないからだ。伝える手段には調査報告書・展示会（展示図録）・広報紙などがある。活字化し、きちんとした印刷物にすれば、地元の図書館はもちろん国立国会図書館や県立図書館、他地域の博物館施設に寄贈することができる。こうすれば、「富士見市の歴史の一端」を広く、そして未来にも伝えられる。

では、学芸員が活字化する「歴史」はどのように選定されるのだろうか。私は拙稿で、市民の要望から市内の揚水組合の歴史を調査し、小冊子にまとめた経験を紹介し、次のようにまとめた。「地域の歴史を紡ぐのは、市民と学芸員との共同作業といえる。学芸員の興味から市民の記憶を調べる場合もあれば、市民からの積極的な要望で学芸員が動く場合もある。両者の縁で記憶は文章に紡がれ、後世に伝えられるのである。」[駒木　2020]

本稿では、前稿で紹介できなかった、もう一つの経験を紹介したい。

２）活字化されていなかった地元の重要産業・座敷箒

1.元箒職人との出会い　平成 22 年（2010）頃、資料館に勤務して 17 年目頃のことである。私は、ある市民のブログから「市内某所にある道端の野菜直売所で座敷箒が売られていた。そばにいた人が、その箒を作った元職人だった」ことを知った。隣のふじみ野市（旧入間郡大井町と旧上福岡市が合併）が、かつて地場産業として座敷箒作りが盛んだったことは知っていたが、市内では聞いたことがなかった。『富士見市史』にも目立った記述はない。ブログの著者に情報提供を求めたが、具体的な回答は得られないまま、3 年ほど経過した。

平成 25 年（2013）秋のある日、年配の男性から資料館に「昔の鎧兜飾りや羽子板飾りがあるが…」と電話があったので、数日後、近世史担当学芸員と 2 人で資料収集の下見のためにお宅を訪ねた。床の間に飾られた飾り物などを拝見した後、お暇しようと玄関に戻った際、上がり框の脇に無造作に置かれていた座敷箒に目が留まった。

私は「この箒の製作者はどなたですか」と男性に尋ねた。すると、「オレだ」。思いがけない答えが返ってきた。元箒職人に会ったのは、これが初めてだった。心を躍らせながら、次々と質問をした。

男性は、市内の座敷箒店で技術を習得した後、自宅で父親と一緒に座敷箒を製作・販売していたそうだ。昭和 40 年（1965）頃になると電気掃除機が普及し、座敷箒の需要が減ったため、商売として作ることはやめたが、今でも趣味で時々作っている。材料のホウキモロコシは自宅の敷地内で少し栽培しているとのことだった。

2.市民学芸員の活動　ちょうどこの頃、難波田城資料館のボランティアである市民学芸員の小森和雄さんが、ふじみ野市立大井郷土資料館主催の座敷箒作り実演会（平成24年）に参加し、およそ 80 歳で現役の箒職人の発言に触発を受けていた。「この辺りでは箒職人は私が最後。箒作りの技も途絶えてしまう」と話すのを聞き、「技を受け継ぐのは無理だが、材料だけでも絶やさないようしたい」と考えた。小森さんは、現役時代に動物園に勤務していた経歴があり“種（しゅ）の保存”に高い関心をお持ちだった。

小森さんは、さっそく情報収集に努め、市内でホウキモロコシの栽培を続けている方を見つけると、種（たね）を譲ってもらい、平成 25 年の春から市民学芸員数名とともに「ホウキモロコシを育てる会」を作り、細々と栽培を始めた。私は小森さんから時どき話を伺っていたが、正直に言うと、「試みはとても興味深いが、長く続けるのは難しいだろう…」と思っていた。しかし、小森さんたちはコツコツと続けた。また、より広い畑を貸してくださる協力者も探し出し、少しずつホウキモロコシの栽培体制が整っていった。平成 28 年 4 月には市民学芸員有志を中心に「難波田城いきものがかり」が発足した。ホウキモロコシを育てる会も合流し、いきものがかりの事業のひとつとして位置づけられた。

これらに対して、資料館は、道具の貸出や、収穫したホウキモロコシの公用車（ワゴン車）での運搬、収穫後の乾燥場所の提供などをした。

3.縁結びの瞬間　私が元箒職人の方と出会って間もなく、その方から「ホウキモロコシの種が欲しい」と連絡をいただいた。自宅で栽培していた種を絶やしてしまったとのことだった。私は、栽培を開始していた小森さんに相談して、種を分けていただき、元箒職人に渡した。そして小森さんと一緒に元箒職人さんの家に伺い、栽培方法や収穫後の処理方法、座敷箒の作り方などのお話を伺うようになった。小森さんも、市内に元箒職人は残っていないと思っていた。

その年（平成 26 年）の夏には座敷箒の製作工程をビデオ撮影させていただいた。

翌、平成 27 年（2015）4 月には、その年度の企画展の担当者が私に決まった。私はテーマを「箒」にしたいと考えた。理由は、元箒職人との出会いがあったからである。栽培を続けていた小森さんの存在も大きかった。資料館の学芸員は常に頭の片隅で「次の企画展は何にしようか、何ならできるかな…」と考えている。学芸員の個人的な思いがあっても、現物資料がなくてはお話にならない。

「箒」に関しては、実物にしても文献にしてもとにかく資料が少なかったので、さらなる資料収集を開始した。そして、昭和 58 年(1983)に市立図書館ビデオ講習会の作品「伝統産業を訪ねて　富士見の箒づくり」が制作されていたことを知った[*1]。出演していた別の元箒職人の浦野幸吉さんを訪ねると、昭和初期から 20 年代まで「箒屋は花形産業」だったこと、隣町（現ふじみ野市）に負けないくらいに盛んだったこと、全国座敷箒製造組合連合協議会の理事長を長く務めた功績で勲五等瑞宝章（ずいほうしょう）を受章した人がいたこと、今もお元気な元職人が数人いることなどが分かった。

こうして、平成 28 年（2016）春季企画展で富士見市の箒作りの歴史を紹介することができた。展示関連イベントとして座敷箒の製作実演会なども開催し、多くの人に伝えることができた。そして、展示図録に写真と文章を記録することで後世に伝えられる可能性を広げたのだ。

*1　小森さんはこの作品の制作に参加していた

３）「歴史」を伝える場としての資料館

そして、箒に関するこの活動は、企画展がゴールとはならなかった。企画展で御縁ができた浦野さんが、小森さん他数人の市民学芸員の「自分たちが座敷箒を作れるようになり、技術を後世に伝えたい」という熱い思いに応えてくださったのだ。

ちょうどこの頃、富士見市が市民協働事業提案制度を始めていた。行政と市民団体が協働して進める事業に対し、助成金を出す制度である。この制度に「難波田城いきものがかり」が「座敷ぼうき製作技能伝承者の育成事業」を提案することになり、小森さんは浦野さんのお宅を度々訪ね、育成事業の計画を練り上げた。資料館もそれをサポートした。そして、平成 30 年度（2018）市民協働事業として採択された。

この事業は、「ほうき作り伝承者」になりたい市民を募集し、浦野氏から座敷箒作りの基礎を指導していただく講習会の開催が核だった。講習会の開催に向け、難波田城いきものがかりの数名が、浦野先生が初心者に指導する際の助手を務められるように「先発組」として、事前に数カ月の講習を受けた。箒製作に不可欠な木製の「ほうき作り製作台」も、市内の木工愛好会・木印（きじるし）の会に依頼し、数台作っていただいた。また、先生の技術を伝承するために解説付きの映像資料も製作した。撮影・編集は市内のビデオ愛好会・わかばにご協力いただいた。

そして、この事業が終了した後、参加者のうち 11 名がさらなる技能向上を目指して、平成 31 年 3 月に「ほうき作り伝承会」を結成し、活動を開始した。同会は、難波田城資料館を拠点として月数回の活動を続けている。同会の設立・活動の詳細については、難波田城資料館(2020)を参照されたい。

記憶を歴史として残すためには、文章化し、活字化することが大切だと述べたが、同時代の多くの人に伝えるには、文字情報だけでは弱いことも事実である。やはり大切なのは、人から人に直接伝えることだ。技術・技能の伝承には映像資料だけでも十分ではない。

今回紹介した「ほうき作り伝承会」設立については、直接教えられる人がご健在で、かつ教わりたい意欲のある人が複数人おり、さらにさまざまな要因が結びついた好例だった。

当市の資料館には類似する複数の団体がある。前身となる富士見市立考古館（1973 年開館、2000 年資料館に改称）で生まれた友の会の諸部会（土器づくり部会、拓本部会、竹かご部会、木綿部会、ふるさと探訪部会）の他、からむしの会、ふじみ手織りの会、美楽（みらく）の会、富士見古文書の会、難波田城いきものがかりが現在も活動を続けている。これらの団体は、ほとんどが資料館主催事業をきっかけとして誕生し、任意団体として活動を続け、会員間で、また、資料館主催事業の講師として「技術」や「地域の歴史」を伝えている。

ほうき作り伝承会で会員に指導をする元箒職人（2019 年撮影）

資料館は、地域の人々の記憶を、歴史として未来に伝える「場」である。市民と学芸員の共同作業により、地域の人々の「記憶」が「歴史」に紡がれるのである。

参考文献

駒木敦子,2020,「『記憶』が『歴史』になるとき－活字で残さないとダメなんです－」,『ダメになる人類学』,,166-169, 北樹出版

富士見市教育委員会,1989,『富士見市史 資料編 7 民俗』

富士見市教育委員会,1994,『富士見市史 通史編 下巻』

富士見市立難波田城資料館,2016,『平成 28 年春季企画展　ほうきと竹かご』

富士見市立難波田城資料館,2020,『難波田城公園・資料館 20 周年記念誌 学びの広場 難波田城』,,150-151